

## 平成27年度「研究大学強化促進事業」フォローアップ 進捗状況概要 筑波大学

### 目 的

筑波大学は、「世界水準の研究環境の実現」「国際通用性のある制度の構築」「国際産学連携体制の強化」等を通じ、「研究力の強い分野を世界トップレベルに」引き上げることで、事業終了時点で、以下の2目標を達成することを目的とする。

- ①世界大学ランキング(THE-TR、QS)100位以内を目指す。
- ②世界と戦える強い分野を強化し、Q値及びV値の世界シェアの増加を図り、10年度目にサブジェクトカテゴリー別順位を、現在100位以内の分野については50位以内、200位以内の分野については100位以内を目指す。

### これまでの実績・進捗状況

- ・ 事業の実施をつかさどる学内推進体制：学長を機構長とする「研究戦略イニシアティブ推進機構」のリーダーシップの下で、研究担当副学長（事業実施責任者）が委員長となる「研究力強化委員会」を設置し、本事業を推進。
  - ・ 研究推進体制改革：研究戦略イニシアティブ推進機構により教職員の全学戦略枠を効果的に運用。特に、重点研究センターに対しては、人事権の付与、戦略枠の割当、運営費支援等の重点化等組織、人材、経費等多面的に支援。
  - ・ 国際テニュアトラック制度：海外一流研究室での活動実績をテニュア獲得基準とする国際テニュアトラック制度によりH26年度末までに22名の教員を採用。すでに一流誌を含むのべ110報の論文実績。
  - ・ 国際共同研究推進：海外研究者との共同研究を促進するための研究者招聘・派遣旅費支援学内公募を実施。論文投稿、学会発表等の実績につながる。
  - ・ URA体制の強化：部局専従URAを新設し、重点研究センター等に配置。また、研究力強化担当学長特別補佐を新たに配置して、推進体制の強化を図った。
  - ・ 産学連携：国際産学連携本部を新設。技術移転マネージャーに加え、産学連携URAを3名配置。海外企業との大型共同研究の契約等実績が出つつある。
- ※ QSランキング：自然科学98位、化学101-150位、総合198位（2014年）

### 今後の課題と展望

- ・ 幅広い学問分野における深い専門性を追求するとともに、分野融合型の領域を開拓し、研究機能の再編成と国際性の強化により、卓越した知の創造拠点として世界トップレベルの研究を展開する。研究センターの改組・再編など既存の研究システムを大胆に改革し、真理を深く探求する研究（基盤研究、学際横断型研究）と、成果の社会還元を目指す研究（社会還元型研究）の両面において最先端研究を展開する。
- ・ イノベーション創出拠点TSUKUBAにおける中核的役割を担い、我が国のグローバルな産業競争力強化に貢献する。「地球規模課題解決に向けた知の創造」に向けた最先端研究を展開していく中で、社会還元型研究により得られた成果については、教育研究諸機関及び産業界との連携を強化し、これを事業化するスキーム、体制を構築する。

### フォローアップ結果

評点区分：順調に進んでいる

#### 全体を通じた所見

- 部局専従 URA と全学組織との連携を強化して、効果的に対応しており、学内でのキャリアパスについても、承継職員への異動もなされつつあるなど、明確な位置付けがなされていることが確認された。
- 構想している制度改革や研究力アップのための戦略的施策は優れた取り組みと評価でき、それに向けて着実に取り組みがなされていることが確認された。筑波研究学園都市という立地条件を考慮した近隣研究機関との緊密な連携も進み、今後のその効果に期待したい。

#### 特に優れた点

- 研究戦略イニシアティブ推進機構により、教職員の全学戦略枠を重点研究センター等に配分、部局専従 URA の配置などにより、研究推進体制改革を進め、研究力強化を図りつつある。
- 技術職員等の在り方の検討を進め、全学的な研究基盤要員の整備方針を決定したことは、地味ではあるが評価できる。

#### 期待する点

- 今後、本事業による取組が、全学的な研究力強化に有効に波及する体制強化を期待したい。
- URA の採用により、論文数や外部資金獲得額等の増加が期待されるが、その効果として現れるまでにはある期間が必要である。それを考慮した上であるが、目標値（主として5年後）と実際の成果との間にやや開きがあるように見受けられる。今後の2年余の間で、URA 効果が加速し、目標値を達成する可能性に期待したいが、学内の潜在的研究力をフルに引き出す上で、URA の活動に改善の余地が無いかどうかの検討を期待したい。